

資料

小児看護におけるシミュレーション方式プレパレーション演習の 実際と看護学生の学び

生田まちよ¹⁾ 宮里邦子¹⁾

Learning of the nursing student and a fact of the simulation method
preparation practice in the pediatrics nursing

Machiyo Ikuta, Kuniko Miyazato

Key words : preparation practice, nursing student, simulation method, pediatrics nursing

I. はじめに

1999年に日本看護協会から「小児看護領域の看護業務基準」が出されるなど、子どもの権利に関する意識が高まっている。子どもの権利の一つの支援として小児臨床看護の現場でもプレパレーションが広まってきている。これまでのプレパレーションに関する報告は、子どもに対して看護師^{1,2)}や学生^{5,6)}が臨床場面で実施したプレパレーションの効果を検討した文献が多かった。臨床場面での効果を高めるためには、教育場面で看護学生（以下、学生と略す）が効果的なプレパレーションに関する学習をすることは課題となる。臨床場面におけるプレパレーションの効果をみた研究に対して、学生への教育に関する報告は、講義前・後・実習後の小児のプレパレーションに関する認識⁷⁾や臨床看護師の授業によるプレパレーションや倫理的配慮の学生の学び⁸⁾、腰椎穿刺を受ける小児の説明に関するレポートを課題としての内容分析⁹⁾などを散見することができる。また、採血を

受ける子どもに対する紙芝居を作成し演じ手と聞き手を経験しての学生への効果をみた研究^{10,11)}がある。このように設定された年齢・テーマの中で学生がツールを作成し演じたことで、子どものイメージが図りやすい等の報告があるが、報告数はまだ少ない。教員がテーマを決めて学生に実施させる方法も効果があるが、多くのパターンを学生自ら考え、それぞれの設定を考えるプロセスやツールを作成し演じることやそれを見学し評価することで、学びの範囲が広がるのではないかと考えた。

Daleの経験の円錐¹²⁾によると、人間の認知は直接的・具体的な経験から種々の抽象化を得て最後に最も抽象的な言語象徴である概念化に達すると述べている。教科書等の文書による学習だけでなく、多様な体験・教育メディアを活用することによって円錐の上昇方向である具体から抽象へと抽象から具体への両方への動きが活発に行われることで教育的に豊かな経験となる。言葉としてのプレパレーションでなく、概念として認知できるようになるためには、これらの経験を積み重ねることで効果的な学習ができると考えた。

受付日 2012年11月16日 採択日 2013年1月25日

¹⁾ 熊本大学大学院 生命科学研究部

投稿責任者 (Corresponding author) : 生田まちよ imachi@kumamoto-u.ac.jp

そこで、プレパレーションを実際に学生自身で考え実施することで、プレパレーションの意味や方法、発達段階や疾患の知識を獲得することがより効果的になるのではなかないと考え、シミュレーション方式プレパレーション演習（以後演習と略す）を実施した。

II. 語句の説明

プレパレーションとは、「子どもが病気や入院によって引き起こされるさまざまな心理的混乱に対し、準備や配慮をすることによってその悪影響を和らげ、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機会を与えること」とする¹³⁾。シミュレーションとは、小学館の大辞泉によると現実と想定される条件を取り入れて、実際に近い状況を作り出すことである。この意味のもとに、本研究のシミュレーション方式プレパレーション演習とは、「対象の小児の発達段階や疾患、家族状況などすべての背景を学生が設定し、アセスメント・問題点などを考え、実際にプレパレーションを行うためのツールを作成して、小児が疾患や処置への対処や心の準備ができるようにする。発表時は学生が、小児、家族、看護師役となり、実際の場面を再現しながらプレパレーションを擬似体験する。さらに、自己評価と他者評価を実施する。これらの一連の演習過程」である。この過程は、ブルームの教育目標のタクソミー¹⁴⁾の認知的領域では、目標は知識、理解、応用、分析、総合、評価というかたちで高次化していく。このシミュレーション方式プレパレーション演習は、小児の発達段階や疾患、プレパレーションの知識を理解して、全ての背景を設定し問題点を考えていく中で、応用、分析が必要となり、実際にプレパレーションを演じることで総合的なものとなる。これらを総合しながら評価として、自己評価・他者評価をする。そして、最終的には、プレパレーションの概念を体得すると考える。

III. 研究目的

シミュレーション方式プレパレーション演習を行い、学生の学びを明らかにする。

IV. 研究方法

1. プレパレーションの講義・演習の実際

1) 対象、講義・演習時間

対象は、4年制大学の3年生74名であった。講義時間は1コマ（90分/1コマ）、グループワーク1コマ、発表時間2コマとした。講義の翌週にグループワークを行い、その1カ月後に発表時間とした。発表時間は1コマで半数のグループ、翌週の1コマに残りのグループが実施した。しかし、グループワークは、1コマでは足りず、授業時間以外でも行う必要があった。

2) 講義内容

講義内容は、先行の文献・書籍¹⁵⁾¹⁶⁾を参考にし、プレパレーションの定義・目的、倫理的側面、インフォームドコンセントとプレパレーションの関係などのプレパレーションの概念、子どもの認知発達と病識、プレパレーションの実施方法、プレパレーションの実際とした。

3) 演習の方法

(1) 演習の目的

学生の本演習の目的は、①小児の発達段階を理解する、②小児の疾患や検査・処置などについて理解する、③プレパレーションの目的・方法を理解し実施するとした。

(2) 演習・発表方法

テーマ及び内容は、小児に関することであればいずれも可とした。グループ編成は、1グループ7～8名全10グループとした。1グループの発表時間は、質疑応答含めて15分、教員からのコメント5分とした。

(3) 学生の演習評価方法

i. 学生演習の評価内容

学生演習に対する評価項目は、プレパレーションのガイドライン、プレパレーションのステップ^{18,19)}や情報伝達での配慮点、子どもとのコミュニケーション方法、プレパレーション時のポイント^{20,21)}を参考にして、教員が方法や注意点を検討し評価項目を抽出した。実施するプレパレーションの評価の項目として、設定した小児の年齢の発達段階・疾患の段階を説明、発達段階・家族などプレパレーションを実施するうえでのアセスメント、設定の小児の問題点・プレパレーションの目標の説明、場所や環境の設定を説明できるとした。プレパレーションの実施項目では、設定の小児にとってわかりやすい言葉を使用している、設定の小児にとって理解できる説明の内容の程度・レベルか、検査や処置の目的・方法・時間の経過・注意点など説明できる、正しい内容での説明、設定の小児に適切なプレパレーションツールの選択、子どもや家族の反応を見ながら実施しているかとした。説明内容は、学生が説明内容を根拠をもって説明できることを評価の重点においた。さらに、学習態度の評価としてプレゼンテーション発表時の準備状態、プレゼンテーション時の態度を加えた。

ii. 学生演習の評価方法

学生は、発表時に上記項目を記載した評価表に従い自己評価・他者評価を行った。自己評価は、発表したグループのそれぞれの学生が、自分たちのグループの発表直後に評価した。他者評価は、見学しているそれぞれの学生が発表グループの内容を発表時間直後に評価した。教員による結果のフィードバックは、2名の教員が評価を行い、それぞれのグループ発表が終わった後の学生間の質疑応答後、教員からの質問・意見を発表した。

2. 学生への効果の調査方法

1) 対象

演習を実施した4年制大学の3年生

2) データ収集期間

20XX年6～7月

3) データ収集方法・調査内容・分析方法

i. グループレポート（以後、レポートと略す）

レポートの内容は、①患者の設定・アセスメントの内容・場所の設定、②プレパレーションの目的、③プレパレーションの実際の中で、設定年齢の小児に理解できるように工夫した点、④発表ツールのコピー（演技等でコピーできないものはシナリオのコピー、必要時写真撮影）とした。

学生がプレパレーション演習を実施した上での工夫の内容を分析した。広辞苑によると工夫とは、「よい方法や手段をみつけようとして、考えをめぐらすこと。また、その方法や手段」としている。工夫は、考えをめぐらすための知識がないとできないことと捉えられる。また、前述の教育目標のタキシソミーにおいては、工夫は、タキシソミーのレベル5統合にあたり、考えを統合したり組み合わせたりして新しいものをつくり出す段階であると考えた。このため工夫したことが学びを得たことと考えた。

ii. 無記名式調査用紙

調査用紙項目は、①小児の発達段階、②小児の疾患や検査・処置、③プレパレーションの目的・方法を、この演習を実施する前と比較してどれだけ理解できたかを、0（全く達成できていない）から10（たいへん達成できている）の視覚的アナログスケールで調査した。また、この目標間の理解度の差を、対象集団の正規性を確認した上でスチューデントのt分布による検定で有意差をみて、上記目的①②③の理解の違いをみた。基本統計量・検定にはエクセル統計2008を使用した。

演習を行ってよかったことや学び、困ったことを記述回答として、その内容をカテゴリー化して質的にまとめた。カテゴリー化やカテゴリー名生成の際には小児・母子看護の臨床・教育経験のある研究者間で意見が一致するまで検討し正確性を高めることに努めた。

3. 倫理的配慮

口頭で、学生に研究の目的、方法、自由意思での参加、途中辞退の権利、プライバシーの保護、提出の有無は、演習の成績には関係しないことを説明した。グループレポートは、演習終了後グループごとに、学生が実施した内容や知識の振り返りを行うことができるように、また、教員が演習の内容確認のために、できるだけレポート提出をするように説明した。このレポートは任意であり、成績の対象とはせずに、研究として発表する際には、分析資料とすることを説明した。この演習の成績評価は、参加・発表すればすべての学生が合格点を取ることができるが、教科全体の評価には反映されないとした。レポート提出は、発表後10日以内として、学生はレポートを提出することによって研究協力に同意したものとした。調査用紙は、無記名式で、全グループの演習終了後に配布した。提出は、回収ボックスを設けて期日までに投函するようにして、誰が投函したかの判断が教員にわからないようにした。

V. 結果

1. レポートについて

レポート提出率は、100%であった。

1) 学生が実施したプレパレーションの設定と内

容 (表1参照)

設定年齢は、幼児後期や学童前期であった。疾患も白血病と1型糖尿病でテーマ設定には偏りがあった。年齢の発達段階は、ピアジェの認知理論などをとりいれて説明することはできていた。しかし、薬などの副作用の説明や処置の内容の説明の理解が不十分で説明内容が間違っている等、発達や疾患の捉え方が具体性に乏しく、捉え方があいまいで、設定が実際の状況から解離しているものもあった。また、学生は各発達段階の標準的な発達を踏まえた設定上の情報が少ないので実施したプレパレーションは、具体性・現実性に乏しいものもあった。

2) 学生がプレパレーションを実施したうえでの工夫 (表2参照)

グループレポートから抽出した学生がプレパレーションを実施するうえで、57の工夫点を記述していた。これを類似のカテゴリーに分類して、「効果的に子どもの理解を促すための工夫」「子どもの意欲を高め興味を持たせるための工夫」「実施場面で子どもの不安を軽減するための工夫」「子どもの反応や理解の確認」「子どもの不安を軽減するためのツールの工夫」「子どもに主体性を持たせるための工夫」「子どもが自分の事として捉えるようにする工夫」「子どもの家族の協力を得

表1 学生が実施したプレパレーションの設定と内容

設定	設定詳細	内 容	グループ数
年齢	4 歳		1
	5 歳		3
	6 歳		2
	7 歳		4
疾患・ 説明内容	白血病	感染予防行動	2
		疾患	1
		化学療法・持続点滴の注意点・感染予防	1
		採血の必要性	2
	1型糖尿病	発症初期で疾患説明	1
		疾患とインスリン療法	1
		自己注射への移行期の退院時指導	1
精査入院	採血	1	

表2 学生がプレパレーションを実施するうえで工夫した点

カテゴリー名	小カテゴリー名
1. 効果的に子どもの理解を促すための工夫 (26)	①子どもにわかりやすい言葉の言い換え・表現 (7)
	②視覚的にわかりやすいように工夫 (6)
	③子どもが実際にできるための工夫 (3)
	④子どもにイメージができる工夫 (2)
	⑤内容が複雑にならない工夫 (2)
	⑥キャラクターを活用してわかりやすくする工夫 (2)
	⑦子どもが忘れない工夫 (1)
	⑧子どもが継続して学べる工夫 (1)
	⑨子どもに実物を見せわかりやすくする工夫 (1)
	⑩コミュニケーション技術の応用 (1)
2. 子どもの意欲を高め興味を持たせる工夫 (10)	①子どもが飽きない工夫 (5)
	②子どもに興味を持たせる工夫 (2)
	③子どもが説明に集中できるような工夫 (1)
	④子どもに意欲を持たせる工夫 (1)
	⑤子どもの意識を高める工夫 (1)
3. 実施場面で子どもの不安を軽減するための工夫 (6)	①実施場面での子どもへの不安の軽減のための工夫 (3)
	②子どもに威圧感を与えない工夫 (3)
4. 子どもの反応や理解の確認 (5)	①子どもの反応や理解の確認 (5)
5. 子どもの不安軽減のためのツールの工夫 (3)	①子どもの不安軽減のためのツールの工夫 (3)
6. 子どもの主体性を持たせるための工夫 (3)	①子どもの主体性を持たせるための工夫 (3)
7. 子どもが自分の事として捉えられるようにする工夫 (1)	①子どもが自分の事として捉えられるような工夫 (1)
8. 子どもの家族の協力を得る工夫 (1)	①子どもの家族の協力を得られる工夫 (1)

() 内は意味内容数

表3 プレパレーション演習を実施して学びやよかったこと

項目	人数
他のグループの発表を見ることで新しい発見や自分たちでは思いつかない方法や表現を学ぶことができた	17
対象の発達段階の子どもに分かってもらえる内容にすることを深く考えることができた	11
子どもの目線になって考えるようになった	8
プレパレーションの実施の際の方法・進め方が理解できた	8
実際に調べ話し合うことで疾患、発達段階の理解が深まった	7
発達段階や子どもの個性を考慮しプレパレーションを行うことの大切さを学んだ	6
家族の意見・反応を含めて考えないといけない	4
わかりやすく説明するには自分が正確に理解しておく必要性を実感した	4
後期の実習への心構えができた	4
教員からのアドバイスで新しい学びを得ることができた	2

表4 プレパレーション演習を実施して困ったこと

項 目	人数
言葉や理解の程度、言葉の使い方が難しかった	15
小児の理解能力や知識が具体的にイメージできず自信が持てなかった	10
グループ内で負担が偏る	8
他の教科でもグループワークがあり、集まる時間の調整が大変だった	3
内容のボリュームの調整が難しかった	2
ツールを作るのが大変だった	2
個性性を配慮して、詳細に作るのが難しかった	2
小児の疾患や親のことも考慮し対処していくのが難しい	1
小児の看護手技についての情報が少なくて困った	1
子どもの意欲の引きだし方が難しかった	1
疾患が他の班とかぶりやすかった	1
授業内での準備時間が少ない	1
母親の視点で考えることが理解できていなかった	1
小児の発達段階と病態の説明を両立させないといけなかったこと	1
発表態度の評価が難しかった	1

る工夫」の8カテゴリーの工夫が抽出された。

れを類似のカテゴリーに分類して、15カテゴリーを抽出した(表4参照)。

2. 無記名式調査用紙について

調査用紙の回収率は、51/74名(69%)であった。

1) 発達段階、疾患や処置、プレパレーションの理解

視覚的アナログスケールによる小児の発達段階の理解は 7.5 ± 1.22 、疾患や処置などの理解は 7.7 ± 1.10 、プレパレーションの理解は 8.25 ± 0.96 であった。3項目の中で、発達段階と疾患の理解には有意な差はなく、プレパレーションの理解は、発達($P < 0.01$)と疾患($P < 0.01$)の理解より有意に高かった。

2) 記述内容

(1) 演習を実施しての学びや良かったこと

71の意味内容の学びや良かったことを記述していた。これを類似のカテゴリーに分類して、10カテゴリーを抽出した(表3参照)。

(2) プレパレーション演習を実施して困ったこと

50の意味内容の困ったことを記述していた。こ

VI. 考察

1. 演習を実施しての学生の学び

小児の発達段階や疾患・処置の理解、プレパレーションの理解の評価指標として使用した視覚的アナログスケールは、学生の主観的・感覚的な理解度を示しており、実際の詳細な理解内容は不明である。しかし、平均7.5以上であり、主観的には理解できたと感じおり、学生の本演習の目的である、①小児の発達段階を理解する、②小児の疾患や検査・処置などについて理解する、③プレパレーションの目的・方法を理解するということは、概ね達成でき、学びを得ることはできたと考える。しかし、この3つの理解のなかで、プレパレーションの理解よりも小児の発達段階や疾患や検査・処置の理解が低い結果を示した。疾患や処置の説明のプレパレーションを行う際には、その説明の基本となる知識を得ることの重要性を理解できるように支援していく必要がある。

学生のプレパレーションを実施しての学びとして「発達段階や子どもの個別性を考慮して行うことの大切さ」や小児への説明に関しても、「児に分かってもらえるような内容にすることを深く考え」「子どもの目線になって考えられるようになった」と、その年齢の認知の世界を探求する姿勢が生じていた。学生がプレパレーションを実施する上で工夫した点においても、プレパレーション実施時のわかりやすく覚えやすい教材、子どもができること、参加することの大切さ、一方的な伝達ではなく、子どもや家族の理解に応じてフォローする等の情報伝達での配慮点²⁹⁾や有効な子どもとのコミュニケーションの方法のポイントを網羅しておりプレパレーションを効果的に実施するための工夫は学ぶことができていた。

一方、この演習を行う中で、多くの学生が戸惑っていたのは、「言葉の理解の程度・使い方」であり、「理解能力や知識が具体的にイメージできず自信が持てない」状況があった。子どもへの説明内容や程度、言葉の使い方などの発達段階の見極めの困難さであり、如何にすれば子どもに理解してもらえるか、子どもに理解してもらえることの難しさを学んでいた。また、プレパレーション時の家族への対応として、一方的に説明を行うのではなく、「家族の意見・反応を含めて考えないといけない」と、家族を中心に置いたケアの学びもあった。

前述の学びや困難だった状況、発達段階の理解が低かったことは、少子化の影響もあり学生が小児に触れ合う機会が非常に少ないことも関連していると考えられる。例えば、発表の中でも、学生は各発達段階の標準的な発達を踏まえた設定上の情報が少ないので実施したプレパレーションは、具体性・現実性に乏しいものもあった。設定した子どもの年齢の基本的な生活習慣の獲得度合い、言葉や読字の発達、生活の様子などをイメージできないことが窺える。教科書で発達段階の講義は実施するが、それだけでは具体的なイメージを持てるまでの理解は難しいようであった。また、疾患に伴

う症状や治療・処置・検査についての知識や理解も不十分であることから、考えられる副作用や苦痛、不安に関する設定が含まれていないグループでは、それらに配慮した内容が盛り込まれていないために、臨場感が伝わってこない発表に終わっていた。

子どもの成長段階や疾患を理解していないと効果的なプレパレーションは実施できない。教育目標のタキソノミーの認知的領域での、知識の獲得が十分でないと、応用、分析が必要となる設定や実際にプレパレーションの内容は、表層的な発表に終わってしまうことが多い。小児の発達や疾患の理解が十分でないと演習は、具体性・現実性に乏しいものになると考える。今後、発達段階をイメージできるような教授方法や疾患・処置の理解度が分るような発表方法等の工夫を行う必要がある。

今回のプレパレーション演習の特徴は、設定をすべて学生で考え、児や家族、看護師役となり、一連の流れをシミュレーションして実施し、評価することであった。この演習は、経験の円錐によると直接的・具体的体験の中の実演体験にあたり、一種の劇にして学習する方法である。そして、発表し合うということで、「他のグループの発表を見ることで新しい発見や自分たちでは思いつかない方法や表現を学ぶことができた」との意見が多かった。また、他者評価をすることは、聴覚・視覚的経験として他のグループの演習を見て経験することにもなる。前述の経験の円錐でいうならば、実演体験という直接体験だけでなく、聴覚・視覚的経験も加わった。これらの経験が効果を奏してプレパレーションという概念の真の理解を促進したと考える。講義を聞くだけでなく、自分で見聞きして、話し、書いて実施してみるという能動的学習活動が記憶の強化につながったと考える。

2. シミュレーション方式プレパレーション演習の評価

学生が困ったことにあげた内容にあるように、

以下を検討していく必要がある。

1) 設定の偏りについて

今回の学生が発表した設定は、学生の困ったことのカテゴリーで「疾患が他の班とかぶりやすかった」が抽出されように、年齢は幼児後期や学童前期で、疾患も白血病・1型糖尿病と偏っていた。先行研究²³⁻²⁵⁾では、同じテーマを学生に課しての検討する場合が多かった。状況として、設定に偏りが生じると同じテーマの設定と類似の効果になり、同じ課題での学生間の差の検討や一つのテーマで内容を詳細に検討できることも考えられる。しかし、今回の方法は、設定をすべて学生が考えるというバリエーションを多くすると、より多くのパターンを学習する機会となり、学びが多くなることを期待している。この患者設定について、同様の疾患や年代でも、より効果的に理解を得るために、グループ間での学びの内容が偏らないような視点を提示できるような質問を行う等の工夫が必要である。

2) グループワークについて

今回は、講義スケジュール・カリキュラムの関係から演習に取れる時間も制限され、1グループ7-8名と大人数となった。グループワークでは、主体的学習の醸成や学生相互の学びが強固になった。しかし、学生は、「グループ内で負担が偏ること」を挙げており、参加度にばらつきがあった。これは石舘ら²⁶⁾が指摘していたことである。グループでリーダーシップを発揮して取り組む学生は、準備段階で多くの役割を果たす学生もいれば、中には、その作成されたシナリオに従ってプレパレーション発表時に役割を演じるだけの学生もいたようであり、そこがグループ内での負担の偏りとなっていた。これにより理解の程度や学びに対しても学生によって偏りがあることが危惧される。多くの学生間に温度差がないような工夫やグループを少数化する必要である。

Ⅶ. おわりに

本研究は、調査用紙は無記名であり、分析用のレポートの提出は任意であり、成績評価には関係ないことを説明したが、教員が学生に行った調査であるためにバイアスが生じている可能性がある。

学生が自ら設定を考え、ツールを作成し実演したこと、また、他者の発表を評価したこと演習を実施した形式であることで、学びの応用、分析が必要となり、実際にプレパレーションを演じることで総合的なものとなり、プレパレーションを効果的に実施するための工夫や配慮点、コミュニケーションの方法のポイントなどを学ぶことができていた。今後、プレパレーションの演習を行ったことでの臨地実習におけるプレパレーション意識への効果・影響を検討していく必要がある。

本研究は、第12回九州小児看護教育研究会で発表した内容に加筆・修正を加えた。

引用文献

- 1) 田久保由美子, 宗村弥生, 白井雅美他: 生体腎移植を受ける子どもと親へのプレパレーションの取り組み(第1報)活動の経緯と看護者の意識の変化, 日本小児看護学会誌, 20 (1): 93-99, 2011.
- 2) 出雲典子, 伊藤聡子, 下田小百合他: 幼児期・学童期の患児に対するプレパレーションを試行してCHEOPSにおける行動アセスメントからの示唆, 日本看護学会論文集小児看護, (38): 11-13, 2008.
- 3) 川原優子: 身体侵襲のある検査に不安を抱えた学童期患児へのプレパレーションの効果, 奈良県立三室病院看護学雑誌, 23: 54-57, 2007.
- 4) 岡田明彦, 山村裕美, 西井美津子: 学童期の子どもを対象にしたプレパレーションの検討, 小児がん看護, 2: 126-130, 2007.
- 5) 河合聡美: 愛着のあるキャラクターを用いたプレパレーションによる効果, 看護教育, 50 (8), 716-719, 2009.
- 6) 三本佳代, 松波典代: 臨地実習における小児への説明と同意のあり方について紙芝居を用いたのプリパレーションを実施して, 日本看護学会論文集小児看護, 38: 343-345, 2008.
- 7) 今野美紀, 上村浩太, 蝦名美智子他: 小児のプレパレーションに対する看護学生の認識講義前・後・実習後の変化より.

- 日本小児看護学会誌, 20 (1):127-135, 2011.
- 8) 永田真弓, 廣瀬幸美, 氏家圭子他:臨床看護師による子どもへのプレバレーションを取り入れた授業における学生の学び, 日本小児看護学会誌, 20 (1):17-24, 2011.
 - 9) 白坂真紀, 桑田弘美:看護学生のプレバレーション演習レポートの分析腰椎穿刺を受ける子どものプレバレーション, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 8 (1):30-33, 2010.
 - 10) 石館美弥子, 沼田友見:紙芝居づくりを取り入れた小児看護学技術演習の学習効果採血を受ける子どものプレバレーション, 湘南短期大学紀要, (22):23-29, 2011.
 - 11) 石館美弥子, 大嶋美智代:プレバレーションにおける演習の効果看護学生が紙芝居の演じ手と聴き手を体験して, 湘南短期大学紀要, (21):105-112, 2010.
 - 12) Dale, E (1947)/西本三十二:デールの視聴覚教育, 日本放送教育協会, 東京, 1957.
 - 13) 及川郁子, 田代弘子編集:病気の子どもへのプレバレーションー臨床ですぐ使える知識とツールー, 中央法規, 東京, 2007.
 - 14) Bloom, B.S., Hastings, J.T., Madaus, G.F., (1956)/梶田毅一, 渋谷憲一, 藤田恵理:教育評価法ハンドブック教育学習の形成的評価と総括的评价, 第一法規出版, 1973.
 - 15) 及川郁子, 田代弘子編集, 前掲13)
 - 16) 田中恭子編著:小児医療の現場で使えるプレバレーションガイドブッカー楽しく効果的に実施する知識とポイント, 日総研, 東京, 2006.
 - 17) 今野美紀, 二宮啓子編, 小児看護技術こどもと家族の力を引き出す技 (pp45-75). 南江堂, 東京, 2009.
 - 18) 田中恭子編著, 前掲16)
 - 19) 岡崎裕子:第Ⅱ章コミュニケーション技術ープレバレーション. 今野美紀, 二宮啓子編, 小児看護技術こどもと家族の力を引き出す技 (pp45-75). 南江堂, 東京, 2009.
 - 20) 田中恭子編著, 前掲16)
 - 21) 及川郁子, 田代弘子編集, 前掲13)
 - 22) 及川郁子, 田代弘子編集, 前掲13)
 - 23) 白坂真紀, 桑田弘美, 前掲9)
 - 24) 石館美弥子, 沼田友見, 前掲10)
 - 25) 石館美弥子, 大嶋美智代, 前掲11)
 - 26) 石館美弥子, 沼田友見, 前掲10)